

漱石語録

加藤 富一

野菊の花は名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しく、野趣があつて、結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい。

これは漱石が明治三十八年十二月二十九日に、『野菊の墓』の作者伊藤左千夫にあてた書簡のことばである。「美し(い)」ものを漱石は好む。『草枕』を「美しい感じが読者の頭に残りさへすればよい」と考へて書いた漱石は、左千夫の作品に自分と同質のものを見いだして高く評価する。

実は漱石は、「人生の真相」を味わわせる小説を書かずにおれないのであるが、そうした「人生の苦」を書いたあとは、漢詩・絵・書を書いて、美しく楽しい世界にはいろうとする。『坊っちゃん』もその世界である。神経質な漱石が「無鉄砲」な子に変貌する。「学校の二階から飛び降り」たりする。自分にできないことを、作中の人物に実現させる。作品の結末でも坊っちゃん「奸物」の赤シャツと野だをばかばかなぐりつけて「不浄な地」を離れる。

さて『野菊の墓』は、また「自然」にあふれた作品である。

私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振ひの出るほど好もしひの。どうしてこんなかと、自分でも思ふくらゐ。

民子は自然の子である。世のけがれを知らぬ。自分は野菊の化身だという。その民子に対して政夫は「卵的の愛」を感じる。「道理でどうやら民さんは野菊のやうな人だ」と、やつのことという。今まで二人は「一度も有意味に手などを採つたことはなかつた」。

漱石は幼いとき、他家へ養子に出された。そこには肉親の愛はなかつた。それで「自然」を好むようになる。「二郎已は昔から自然が好きだが、語り人間と合はないので、已を得ず自然の方に心を移す訳になるんだらうかな」。漱石にとって「自然」と自然の愛に満ちた『野菊の墓』は、「何百篇よんでも」感動せずにおれない佳品であるのは当然のことである。

また「美しい」作品といえば、中勘助の『銀の匙』が挙げられる。

(本箱の引き出しの)なかには子安貝や、椿の実や、小さいときの玩びであつたこまこました物がいつぱいつめてあるが、そのうちにひとつ珍しい形の銀の小匙のあることをかつて忘れたこ

とはない。⁽³⁾

この文章で始まる「銀の匙」を漱石は激賞した。そしてその推薦によって、東京朝日新聞にこの作品が掲載されることになった。⁽⁴⁾「漱石はこの作品が子供の世界の描写として未曾有のものであること、またその描写がきれいで細かいこと（略）などを指摘して賞賛した」⁽⁵⁾。

お蕙ちゃんは勝ち気な人なれた子で、ぱっちりした目とまつ黒な髪をもっていた。青白い滑らかな頬には美しい血の色がすいてみえた。（略）私は満足してあらたに君臨したこの女王の願使に身をまかせようと思った。⁽⁶⁾

この作品を、最初に評価したのは漱石である。そして現在の日本の作家・評論家たちが、近代の作品の中で最も高く評価している一つがこの作品である。漱石の鑑識眼が卓越していることを知らされる。和辻哲郎は「大人にとっては、人の背におおさつているような幼い子供の心の細かい陰影の描写などは、実際驚嘆に値する」と賛辞を呈している。この作品に見られる美しさは、「描写がきれい」であることと、表現している「深い人生の神秘」⁽⁷⁾である。これがまた「自然で、淡泊で」ある。これは、「野菊の墓」と通いあうもので、漱石が「何百篇」も読みかえさずにおれないものなのであろう。

漱石は「人間と合はない」、「人間は生きて苦しむための動物かもしれない」と嘆く人物である。そうした人間が、いかに生きていくか。その方向は「自然」であり、「野趣」であり、「美し（い）」ものであり、「淡泊」である。そこに束の間の安らぎを求め、漱石は苦しい人生を生きる。

二

「仕様がな。覚悟を極めませう」

代助は背中から水を被った様に顛へた。社会から逐ひ放たるべき二人の魂は、ただ二人対ひ合つて、互いを穴の明く程眺めてゐた。⁽¹⁰⁾（『それから』十四）

「覚悟」をきめているのは三千代である。「社会」から追放された自分たちは、しかし自分たちの行くべき道を歩いているのである。世間は強大な力でわがゆくを阻む。けれども三千代は代助を信じて、ともに進もうとする。

ところが同じ出発点に立ちながら、代助はおののく。女のような度胸はない。窮地に立つと男は恐れおののく。「穴の明く程」三千代を眺めるが、それは、自分がない強さを持つ女に驚愕しているのである。女は泰然として決断を迫る。

ここで思い起こすのは、『曾根崎心中』のお初である。主人の意に反して、天満屋の遊女お初と結婚しようとする徳兵衛が、もう大阪にはおれないだろうと泣く。それに対して、女は次のように徳兵衛を励ます。

さりながら心たしかに思し召せ。大阪を堰かさんしても、盗み街の身ではなし。どうしてなりとも置く分は、わしが心にある事なり。逢ふに逢はれぬその時は、この世ばかりの約束か。さうした例のないではなし。死ぬるを高い死出の山、三途の川は堰く人も、堰かる人もあるまい。⁽¹¹⁾

生活は私がどうなりとします。どうしても逢えない時は、あの世で夫婦になればよいのです。男が泣きくずれているのに、女は腰がすわっている。いざという時、女は強い。「生」と「死」を見きわめている。「生も一時のくらゐなり。死も一時のくらゐなり」と悟っている。瞬間が「生」であり、一瞬が「死」である。一瞬一瞬「生」になり、一瞬一瞬「死」になりきる。女は「生」から「死」に移るのではない。「生」のときは「生」になりきっており、「死」のときは「死」になりきっていると考えられる。

また、これに関連するのは『一言芳談抄』の次の文章と、それについての小林秀雄のことばである。

比叡の御社に、いつはりてかんなぎのまねしたるなま女房の、十禅師の御前にて、夜うち深け、人しづまりて後、ていとうていとうと、つづみをうちて、心すましたる声にて、とてもかくても候、なうなうとうたひけり⁽¹³⁾。

「なま女房」は、「生死無常」の世の中で、いかに生きるかと問われて「この世のことはとてもかくても候」と答える。小林秀雄がこの文章を読んで「あやしい思い」を持ちつづける。それは「なま女房」の無常観に「常なるもの」を見いだしたからである。「とてもかくても候」は「自己をわす(れ)⁽¹⁴⁾」ている。「動じない美しい形」がある小林秀雄は感嘆する。戦乱の中世に生きるには、「自己の身心を脱落せしむる⁽¹⁵⁾」ほか道はないのである。そしてその道は「覚悟を極めた三千代の道に通ずるのである。

「覚悟」といえば、平塚らいてうの態度も毅然としている。短編『愛の末日』がきっかけとなって、らいてうは森田草平と心中しよう

とする。釈宗活について参禅し、「父母未生以前の自己本来の面目」という公案をもらったらいてうは、あふれるような力の充実を感じている。明治四十一年三月二十一日、草平と、塩原温泉から雪道をのぼる。草平は気が弱くなって、らいてうの渡した懐剣を谷底に投げ捨てる。それまで受身であつたらいてうは態度を一変する。歩けなくなった草平を凍死させないようにして夜を明かす⁽¹⁶⁾。らいてうは次のように書く。

打ちつづく雪の連峰は、月光に照らし出されて、明暗さまざまな複雑な光の屈折を見せて幾条もの瀑布が音もなく中空から落ちてくるような、なんともいいようもない荘厳さ⁽¹⁷⁾。

強靱な精神が草平と自分を守りつづけ、翌朝警官に発見されて、山をくだる。漱石が円覚寺帰源院で宗演に「父母未生以前の自己本来の面目」の公案をもらったが、「彼は門を通る人ではなかつた⁽¹⁸⁾」。しかし、らいてうはこの時「自己」を発見する。

三

病気の時には自分が一步現実の世を離れた気になる。他も自分を一步社会から遠ざかつた様に大目に見て呉れる。此方⁽¹⁹⁾には一人前働かなくても済むという安心が出来、向ふにも一人前として取り扱ふのが気の毒だといふ遠慮がある⁽¹⁹⁾。

漱石は現実界において「悪戦⁽²⁰⁾の人」である。日夜、苦闘を続ける人である。「生存競争」は厳しい。それで「学校が始まるのは何よりいやだ⁽²¹⁾」という。熊本時代には、零時間の授業までして、生徒の寺田寅

彦を感嘆させているのに、本人は可能ならば学校へ出たくないのである。

だから「一歩社会から遠ざか(る)」ことを希望する。しかし、そのためには正当な理由がなければならぬ。病気になることが理由になる。病気は、それになることを世の多くの人が嫌がる。ところが漱石にとっては、それが好ましいものとなる。「近頃の健三は頭を余計遣い過ぎる所為か、どうも胃の具合が好くなかつた」。この「胃の具合」の悪さが続くと、そのうちに病床に臥せることとなる。漱石にとって、それは厳しい現実を脱出することのできる条件となる。

ところで、同じ病気でも神経衰弱は漱石を苦しめる。これは「あまりに意思的な生活が彼を『生』から遮断し、その内面を荒廃させかけたところにおこつた反作用⁽²³⁾」である。漱石は大目に見られるどころか、現実社会から遮断されそうになる。そこで「距離的に遠い場所に赴くことによつて(略)『生』の根源の力をさぐりあて⁽²⁴⁾」ようとして松山中学に赴任するのである。病気が漱石の現実を大きく揺さぶつた。しかし、東京と松山との距離は「彼の本来の自己」と現実の自己との距離と考えられる。漱石の「生」にとつて、神経衰弱は避けることのできない必然のものであつた。

だからこそ「今の世に神経衰弱に罹らぬ奴は金持ちの魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か左らずば、二十世紀の軽薄に満足するひやうろく玉に候⁽²⁵⁾」というのである。漱石は「金持ち」を嫌う。「馬の眼玉を抜く⁽²⁶⁾」ようなことをして金もうけをするからである。「無教養の無良心」を批判する。機械文明に満足している者に苦言を提する。「生」の根源をさぐらずにおれない漱石は、悪戦して神経衰弱がひどくなる。

また漱石は、現実社会における名誉というものに関心を持たない。その一つは文学博士の学位を辞退したことである。明治四十四年二月

十九日、東京朝日新聞は、東京帝国大学文科大学が文学博士会を開き、佐佐木信綱・幸田露伴等とともに、夏目漱石を文学博士に推薦する旨の記事を載せた⁽²⁷⁾。二月二十一日、学位記が漱石宅へ届いたが、漱石は辞退を申し入れる。文部省専門学務局長福原鏡次郎宛の書簡は次のようである。

学位授与と申すと二三日前の新聞で承知した通り博士会で小生を博士に推薦されたに就て、右博士の称号を小生に授与になる事かと存じます。然る処小生は今日迄たゞの夏目なにがしとして世を渡つて参りましたし、是から先も矢張りたゞの夏目なにがしとして暮りたい希望を持つて居ります。従つて私は博士の学位を頂きたいのであります⁽²⁸⁾。

漱石は、新聞屋も大学屋も同じく商売だと考えている。おかみのこととは尊くて、民間のことは下卑なものだとは考えていない⁽²⁹⁾。肩書きでいばろうとは考えない。無位無冠が自分の本来の姿だと考えている。小理窟をこねるといつて弟子が批判しても、そうせずにはおれないのだと答えている。現実社会は金や地位がものをいう。一生借家にしか住めず、家計が火の車だつた漱石は、金もなければ名誉もいらぬ人であつた。世俗に生きているが、世俗の塵にまみれたくない人であつた。書きつづけるため、胃を悪くしやすいが、現実と妥協することなく、火宅の中で生き続けたのである。

四

自^マをすて、神に走るものは神の奴隷なり。神の奴隷たるよりは死する事優れり。況んや他の碌々たる人間の奴隷をや⁽³⁰⁾。

漱石は「自己本位といふ言葉」⁽³¹⁾を握ってから強くなった。これは神に頼ることをしない。何者かに頼ることは、自己を否定することになると考えるからである。自分はどこから来たのかは分からない。しかし、自分の行く道は自分できめよう、というのである。

『明暗』⁽³²⁾には、次のような記述がある。

「秀子さんは、まさか基督教ぢやないでせうね」

「何故」

(略)

「真似目腐つた説法をするからかい」

「え、まあ左右よ。あたし始めてだわ。秀子さんのあんな六つかしい事を仰しやる所を拝見したのは」

「彼奴は理窟屋だよ。つまりあ、捏ね返さなければ気が済まない女なんだ」

延子は兄の健三にむかって、兄嫁を批判する。「説法」が気に入らないのである。宗教は自己を捨てたところに成立する。すべてを神にまかせる時、大きな安心を得ると考えられる。ところが宗教を信じない延子は、自分と異なる考え方は「むずかしい事」と受けとる。信仰は信じた者にとつて真実である。しかし、信じない者にとっては「理窟」としか思えない。そしてそれを、その人を、排斥する。

ただ秀子との議論で、延子は、「昨日のやうな気高い心持になつて、此小さいお延を憐れんで頂きたいのよ」⁽³³⁾という。秀子を神の地位に押し上げてしまうのである。こうなると、凡人である秀子は困る。かくて延子は優位に立つ。以上のことは、漱石の考えに近いといつてよからう。

また漱石は次のようにいう。

私は何が嫌ひだつて耶蘇坊主が偽善の面を被るのほど嫌ひなものはない。クリストの教はハンブルで有らねばならぬと説きながら、其自分がハンブルどころか、まるで反対なんだから驚ろく。唾棄するに値ひするね!⁽³⁴⁾

キリスト教の神父や牧師も人間である。これらの聖職者は教会に住む。そこは組織である。俗世と離れてはいるが、西行のように一人で庵に住んでゐるわけではない。組織の中には世俗がはびこる。したがって、言うことと行うこととは一致しない。それが「偽善」である。質素であれと説きながら、贅沢な衣類を着る。それは実は、信者の寄付金によつて購入したものである。

良寛は、玉島の円通寺で禅の修業をした。ここは今の大学にも当たるところで、全国から多くの僧が集まつていた。しかし、ここにも世俗がはびこつていた。師の国仙和尚のもとを去つて、良寛は諸国行脚の旅に出る。

また井上ひさし氏は、十六歳の時に仙台市東北の郊外にあるカトリックの児童養護施設「光ヶ丘天使園」に収容されて⁽³⁵⁾いた。その師父たちは「荒地を耕し人糞を撤き、手を汚し爪の先に土と糞をこびりつかせ」⁽³⁶⁾て野菜を作り、また「継ぎの当つた修道服」を着ていた。ところが、三年後井上ひさし氏が大都會の大学に入学すると、その聖職者たちは氏を「微かに失望させた」。聖職者たちは「天主の存在を証明する公理を立ちどころに十も二十もひねりだしてくれたが、その手は気味の悪いほど白く清潔で、それがわたしをすこしずつ白けさせ、そのうちにわたしはキリスト教団の脱走兵になつてしまつて⁽³⁷⁾いた」と

いう。

漱石はさらに次のようにも書く。

今日野村伝⁽³⁸⁾と上野を散歩したら、耶蘇教の戸外演説があつた。聞き手は一人もない。大晦日である。人間は衣食の爲めには狂氣じみた事も真面目にやるものですな。其例沢山あり⁽³⁹⁾。

キリスト教の戸外演説を「狂氣じみた事」といつている。「大晦日」は金銭の決算をする日である。この日に街頭で声をからすのは、常識では考えられないといふのである。「自己」に頼る漱石は、神に頼る人の気持ちを理解することができない。説教を「衣食の爲め」と見てゐるのである。「漱石らしい」⁽⁴⁰⁾考え方といえよう。

伝道者はいわば世捨人である（大きな教会にいる場合は俗世にいるのと同じになるが）。現世で生きる人は衣食のために奔走せねばならぬ。しかし、道を伝える人は、神に奉納される金によって生活できるから、「衣食の爲め」に走りまわる必要はない。漱石は世を捨てることができなかつた。西行のように妻子を捨てることをしなかつた。「現実」からのがれたいと希望したが、実現したのは、大学を去つて自由業（新聞小説を書く仕事）になつたことだけである。この人に信仰心は起こらない。人間の當爲は、「衣食の爲め」と考えるしかないのである。

五

武者小路さん。気に入らない事、癪に障る事、憤慨すべき事は塵芥の如く沢山あります。それを清める事は人間の力で出来ません。それと戦ふよりもそれをゆるす事が人間として立派なものな

らば、出来る丈そちらの方の修養をお互にしたいと思ひますがどうでせう。⁽⁴¹⁾

「意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」⁽⁴²⁾と、かつて漱石はいつた。若い実篤は「気に入らない事」を漱石に訴える。「住みにくい」人の世で苦労してゐるのである。漱石も以前はそれを超越することができなかった。ところが没する一年前のこの書簡では、「ゆるす」ということを提案するようになったのである。

ところが「ゆるす」とは、こちらが正しいといふ考えに立つことばであろう。「自己本位」⁽⁴³⁾の漱石は、当然そういう立場をとる。世の中には「気に入らない事」が多い。正しい自分から見ると、それはすべて誤りである。腹が立つ。住みやすい所へ引き越したくなる。そこで『草枕』の画家は、非人情の世界に生きようとする。しかし妻子をかえて生きていかねばならぬ漱石は、午前中に書いた小説で濁つた心を、午後は漢詩を作ることで清めるぐらいのことしかできない。正義の人漱石の人生は苦しい。

ところで、この「ゆるす」は漱石晩年の「則天去私」に近い考え方であるといわれる。「私」は「自己」であり、その「自己本位」を去るのは、「ゆるす」といふ行動であるからである。そして「去私」は「天」の立場に立つものである。「天」とは「天網恢々疎而不失」⁽⁴⁴⁾とあるように、「懲罰する者」をさすことになる。漱石は、懲罰者の立場で、上から下の者を許容するのである。

猪野謙二氏が「則天去私」にまつわる漱石神話を信用することができない⁽⁴⁵⁾といわれる。次にこれが問題となる。「異質な対立者との対決によつてのみ、はじめて自己の本質に触れることができる」⁽⁴⁶⁾はずである。それを、対決せずに「ゆるす」というのは、まさに「修養」

の目標にすぎないのでなからうか。漱石の立場は、依然として懲罰者のそれであろう。

漱石はまた、書簡で次のように言っている。

決して相手を拵へてそれを押しちや不可せん。相手はいくらでも後から後からと出て来ます。さうして吾々を悩ませます。牛は超然として押して行くのです。何を押しかと聞くなら申します。人間を押しのです。文士を押しではありません。⁽⁴⁷⁾

相手を拵えて押してはいけない、という。欲望に満ちた人間を相手にして、欲望に満ちた自分が押してみても、そこには争いの場があるだけである。そこで「牛」を持ち出す。理を超え、非を越えて押すのである。牛の眼に欲望は見いだされない。そうした眼を持つものが「人間を押し」の「人間」である。漱石はしかし、その「人間」ではない。「文士」である。漱石は、自分が懲罰者の立場から降りられないことを知っている。そこで、その立場の実現を芥川や久米に託すのである。

漱石はまた『明暗』の中で、小林に次のように言わせている。

「僕だつて朝鮮三界迄駈落のお供をして呉れるやうな、実のある女があれば、斯んな変な人間にならないで済んだかも知れませんよ。実を云ふと、僕には細君がないばかりぢやないんです。何にもないんです。親も友達もないんです。つまり世の中がないんですね。もつと広く云へば人間がないんだとも云はれるでせうか」⁽⁴⁸⁾

「世の中がない」「人間がない」を、佐藤泰正氏は「日常性から(の)脱落」⁽⁴⁹⁾とされる。「疎外された人間の消しえぬ情念の起伏」とも。そして「そこには痛烈な作者の反問がみられる」と。絶筆の中で漱石は、これは「天」が僕に命ずるのだと小林に言わせている。かつては「自己」に頼っていたが、今は「天」に頼らざるを得なくなつた立場がここに見られる。そしてそれは、「疎外された人間」としての漱石の反問と読みとることができるのである。

この立場はしかし、もはや懲罰者のそれではない。「ゆるす」といい、それを目標にして「修養」しようとするが、それはむなしく地に墜ちたと考えられよう。漱石(の創作した人物たち)も「日常的な限界を超え出ることはない」⁽⁵¹⁾。「世の中がない」「人間がない」という状態でも人間は生きていかなばならない。朝鮮や満州まで落ちていってもしきなればならない。そしてそれは「天」の命によるものであり、懲罰者どころか、「天」の前にひれ伏す人間の姿をそこに見るのである。それは矛盾である。しかし「いま『明暗』の作者はその矛盾に眼を閉じることはできない」⁽⁵²⁾。そして語り手は「慈憐」の眼を作中の人物に注ぐ。それは「天がすでに恣意なる多義性のなか」⁽⁵³⁾にあると考えることを認めることになろう。

六

彼は前を眺めた。前には堅固な扉が何時迄も展望を遮つてゐた。彼は門を通る人ではなかつた。又門を通らないで済む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。⁽⁵⁴⁾

宗助の参禅は失敗だつた。わずか十日ほどのそれでは無理もないこ

とであろう。指導してくれた宜道は「悟の遅速は全く人の性質で、それ丈では優劣にはなりません」と慰めてくれるが、宗助は「鎖ざされた扉の前に取り残された」感じを持った。

漱石の蔵書『禪門法語集』⁽³⁵⁾には、次の書き込みがある。

- 此和尚ハ無の方面ヨリ説キ来ル。読ム人誤マラレントス
○ 何ノ念モナキ様ニナツテタマルモノカ。馬鹿氣タ事ヲ云フ故
大衆ヲ迷ハス也

漱石は「無」について反論している。この考え方を作品にしたのが『夢十夜』の第二夜である。

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけて置いて、それから全伽を組んだ。⁽⁵⁶⁾——趙州曰く無と。無とはなんだ。糞坊主めと齒嚙をした。

「趙州曰く無と」には拠りどころがある。『正法眼蔵』第三仏性に「趙州實際大師⁽⁵⁷⁾にある僧とふ『狗子に還仏性有りや無や』。趙州いはく『無』である。『狗子』は犬である。僧が趙州にたずねる。「犬に仏性があるか」と。それに対して趙州の答えたのが、「趙州曰く『無』である。

「侍」が和尚の室からさがって来る。そして右のように「無とはなんだ。糞坊主め」という。「自己本位」の漱石は自己否定ができない。自己こそ唯一のよりどころである。それを捨て去ることはできない。夢の中の侍（実は漱石）は「骨も肉もめちやくちやに砕いてしまったくなる」。これは「松山中学の教師になる直ぐ前の不安な時期」⁽⁵⁸⁾に對

応するものである。

『草枕』には、「無」が次のように書かれている。

身に落ちかゝる災を知らぬとすれば無邪氣の極である。知つて災と思はぬならば物凄。黒い所が本来の住居で、しばらくの幻影を元のままなる冥漠の裏に収めればこそ、かやうに間靜の態度で有と無の間に逍遙してゐるのだらう。⁽⁵⁹⁾

「災を知らぬ」「無邪氣」な幼児。それは巧まずして「極樂の次の間」⁽⁶⁰⁾にいる。「無」は「本来の住居」、「黒い所」である。そして「有」は「幻影」、「三尺の空間」。この「有と無の間」に那美さんはいる。そして「間靜の態度」である。それは、「有」なる「幻影」を「元のままなる冥漠の裏に収め（る）」ことができるからであった。

漱石は、大正五年十一月十五日、富沢敬道あて、次の書簡を送っている。

変な事をいひますが私は五十になつて始めて道に志ざす事に氣のついた愚物です。其道がいつ手に入るだらうと考へると大変な距離があるやうに思はれて吃驚してゐます。あなた方は私には能く解らない禪の専門家ですが矢張り道の修業に於て骨を折つてゐるのだから五十迄愚図々々してゐた私よりどんなに幸福か知れません。(略) あなた方は私の宅へくる若い連中よりも遙かに尊い人達です。⁽⁶¹⁾

「あなた方」とあるのは、敬道のほかに鬼村元成を含めていうのである。二人は神戸市平野町の祥福寺で修業する若い禪僧である。上京

して漱石に世話になったので、そのお礼に漱石へ饅頭を送った。それに対する礼状である。

漱石は若い時に、鎌倉田覚寺帰源院で参禅した。『禅門法語集』も読んだ。「五十になつて始めて道に志ざす」人ではない。しかし、そのころは「門を通る人ではなかつた」。「五十になつて始めて」門を通れそうになつたのである。それは、俗にいて俗を離れることがわかつて来たのであろう。「ゆるす」も不十分ながら、その方向の考え方といえる。

そして、木曜会の若者たちは 漱石を越えることはできない。ところが、若い二人の禅僧は漱石山脈の人々を遙かに越えている、と漱石には思えるのである。だから「遙かに尊い人達」と書いた。「無」は俗世では実現しにくい。ところが、出家ではあるが「無」を実現しているように見える若い僧がいる。漱石も出家すれば敬道たちのようになるかもしれない。それを在俗のままでも実現しようとした。そのため「齒嚙」するだけで、実現はできなかった。けれども、今は俗世にいて、「さまざまの弱点や卑小さを見せ、それを克服しよう」という気になつたのである。これが「無」である。死をあと一カ月ほどにひかえて、漱石は「尊とい」人に近づいたのである。

注

- (1) 「余が『草枕』」。新書版漱石全集第三十四巻。
- (2) 『行人』“帰つてから”六。
- (3) 岩波文庫本。前篇一。
- (4) 明治四十五年(一九一二)。
- (5) 和辻哲郎。岩波文庫本解説。
- (6) 前編四十一。
- (7) (5)に同じ。

- (8) (5)に同じ。
- (9) 夏目鏡宛書簡。明治三十四年九月二十六日付。
- (10) 『新書版漱石全集』による。
- (11) 『完訳日本の古典』による。
- (12) 『正法眼蔵』“第一現成公案”。
- (13) 小林秀雄『無常という事』(角川文庫本)の冒頭で引用されている。
- (14) (12)に同じ。
- (15) (12)に同じ。
- (16) 加藤富一『近代文学の女人像』“平塚らいてう”(近代文芸社。昭和六十一年)。
- (17) 平塚らいてう『元始、女性は太陽であった』。
- (18) 夏目漱石『門』二十一。
- (19) 『思ひ出す事など』五。
- (20) (19)に同じ。
- (21) 野間真綱宛、明治三十八年九月五日付書簡。
- (22) 『道草』六。
- (23) 江藤淳『決定版夏目漱石』“夏目漱石小伝5”。
- (24) (23)に同じ。
- (25) 明治三十九年六月七日付、鈴木三重吉宛書簡。
- (26) 『吾輩は猫である』十。
- (27) 『増補改訂漱石研究年表』六五七頁。
- (28) 『新書版漱石全集』第三十四巻、二四二頁。
- (29) 朝日新聞入社辞。『新書版漱石全集』第二十一巻、一八一頁。
- (30) 『新書版漱石全集』第二十四巻、一二九頁、明治三十八年・九年。
- (31) 同上第二十一巻「私の個人主義」一四二頁。
- (32) 百十一。
- (33) 『明暗』百二十九。
- (34) 明治四十三年十一月三十日。対話。『新書版漱石全集』第三十四巻、二二二頁。
- (35) 井上ひさし氏自筆年譜による。
- (36) 井上ひさし『道元の冒険』あとがき。

- (37) 同上。
- (38) 東京大学英文科三年生。
- (39) 鈴木三重吉宛書簡。明治三十八年十二月三十一日付。『新書版漱石全集』第二十七卷。
- (40) 坂本育雄『鑑賞漱石語録』二二七頁。(桜楓社。昭和五十五年五月)。
- (41) 大正四年六月十五日付武者小路実篤宛書簡。『新書版漱石全集』第三十一卷。
- (42) 『草枕』冒頭の文。
- (43) 「私の個人主義」。『新書版漱石全集』第二十一卷、一四一頁。
- (44) 岡崎義恵『漱石と則天去私』四七六頁。
- (45) 『文芸読本夏目漱石』“日本の思想家・漱石”。
- (46) 同上。
- (47) 大正五年八月二十四日付芥川龍之介・久米正雄宛書簡。『新書版漱石全集』第三十一卷。
- (48) 『新書版漱石全集』第十四卷、八十二。
- (49) 『夏目漱石論』三九一頁。
- (50) 同三九〇頁。
- (51) 同上。
- (52) 同三九一頁。
- (53) 同三九三頁。
- (54) 『門』二十一。
- (55) 光融館発行。明治四十年刊。
- (56) 『新書版漱石全集』第十六卷、三十二頁。
- (57) 中国河北の趙州観音院に往する從諗(しゅういん)(七六八九七)。禅宗の傑僧。
- (58) 桶谷秀昭『増補版夏目漱石論』八二頁。
- (59) 『新書版漱石全集』第四卷、六三頁。
- (60) 鈴木大拙『仏教の大意』一一〇頁。法蔵館発行、昭和五十九年。
- (61) 『新書版漱石全集』第三十一卷。
- (62) 井上ひさし『道元の冒険』あとがき。